

基肥施用量がキヌサヤエンドウ「紀州さや美人」の小ほう発生および収量に及ぼす影響

1. はじめに

「紀州さや美人」は当センターで新たに育成したキヌサヤエンドウ品種であり、現行の主力品種である「美笹」と比較して、果梗の小ほう（ハカマ；表紙写真）の発生が少ないという特徴があります。小ほうは出荷時に逐一作業で除去する必要があるため、本品種の導入によって出荷調製の作業が大きく軽減されることが期待されます。そこで、今回は、「紀州さや美人」の普及を進める目的で、本品種に適切な基肥の施用量を検討しました。

2. 材料および方法

2010年8月20日に露地圃場において「紀州さや美人」を播種し、基肥が小ほう発生および収量に及ぼす影響を検討しました。基肥施用量は①多基肥区（15kg/10a）、②中基肥区（7.5kg/10a、慣行施用量相当）、③少基肥区（2kg/10a）の3処理区を設定し、それぞれの処理区での小ほう発生率と収量の推移を調査しました。また、追肥はどの処理区とも10月8日に8kgN/10a、11月10日に6kg/10aを施用しました。

3. 試験結果

小ほう発生率は図1のように推移しました。

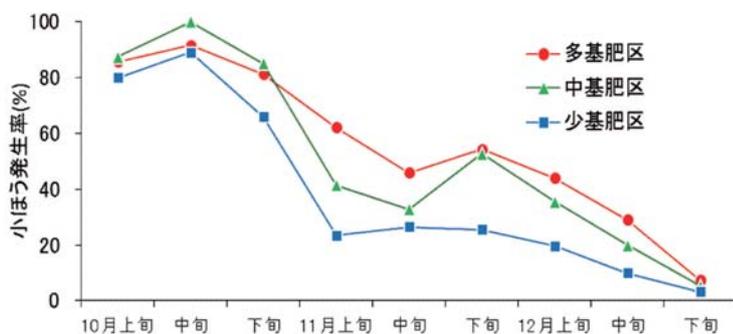


図1 基肥施用量と小ほう発生率との関係

いずれの処理区とも収穫初期の発生率は80%以上と高いものの、10月下旬から11月上旬にかけて大きく低下し、以後は緩やかに減少しました。処理区間で比較すると、基肥施用量が多い区ほど小ほう発生率の低下が鈍くなる傾向が認められました。

月別の収量は図2のとおりでした。最も収量が多かったのは中基肥区で、多基肥区では生育前半の収量が少なく、少基肥区では生育後半にあたる12月の収量がやや少ない結果となりました。

4. まとめ

以上の試験結果から、「紀州さや美人」では、慣行よりも基肥施用量が多すぎると生育前半の収量が低下し、逆に少なすぎると小ほう発生は抑えられるものの生育後半の収量が少なくなることが明らかとなりました。そのため、「紀州さや美人」には慣行と同等の基肥施用量が適用可能であると考えられました。

今後は、適切な追肥の施用量など、「紀州さや美人」の普及に必要な情報の検討をさらに進め、小ほう発生の抑制と収量の確保を両立させた本品種の栽培体系の構築を目指していきたいと考えています。

（園芸部 松本 比呂起）

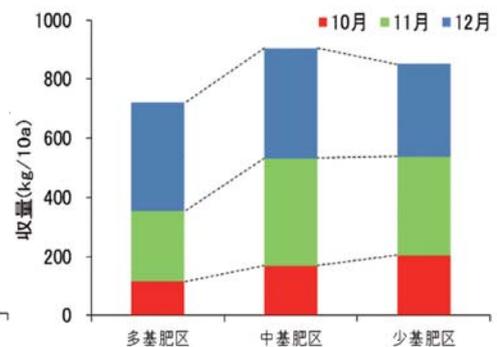


図2 基肥施用量と収量との関係